2023年12月

課題本 『いい女へのパスポート』

秋山　さと子/著　　牧羊社　　１９８６年

◆◆◆12月の読書会から

先月の参加者から提出された感想文を読んで振り返ることから始まりました。作者や作品について調べる→調べるだけで終わらず、コンピュータが答えるのに困る質問を自分にする→感想文になる。読書会で得たこと感じたことを言葉で表す→ほかの人の感想文を読む→さらに感じる、得ることがある→次の読書会でみんなの感想文を読んで感じたことを共有する→自分を更新する…竹原読書会は毎月これを繰り返しています。

今月の課題本は『いい女へのパスポート』。1986年、37年前に出版された本です。「いい女とは」「自分の仕事って？」など今月も話は様々な方向に広がり、出版された時代の背景に注目して調べてきた参加者もいて理解を深める助けになりました。本の中に書いてあることが古く感じるくらい時代が追いついてきたこともあるし、そのまま残る価値観もある。筆者と関係があるユング心理学にも話は及びました。

（文責：森下）

2023 年 12 月竹原読書会　『いい女へのパスポート』秋山さと子

吉川五百枝

そろそろ、人生のパスポート（存在証明）を返上しなければならないなぁと思っている今頃、この題名でご教授を受けるのには、ちと遅かりしと思う。しかし、ユング心理学の研究家でもある著者だから、ユングに片寄せて読んで見ようと表紙を眺めた。

帯にある文章に【自分を取り巻く環境から抜け出ることができないまま、その生き方に疑問を持ち、悩んでいる女性達へ―。】と書かれている。

生き方に疑問を持ち悩む。確かに問題だと思う。それにしても、〈自分を取り巻く環境〉は、抜け出せるのだろうか。自分を取り巻く環境とは、自分が動くと一緒についてくる固有の匂いのようなもので、周りをどんなに変えても匂いはついて回るのではないか。つまり自分が事の真ん中にいるのだ。環境のせいにして、抜け出そうとするのではなく、真ん中にいる自分の生き方が、疑問や悩みの生みの親であって、その自己を知ろうということになるのではないか。

この場合、パスポートは、誰かが発行してくれるものではなく、自分のアイデンティティ（アイデンティティは自己証明のパスポートのような性質だと説明されてきた）を自分の中に確かめる思考への“お誘い”なのだろう。「自分を知ろう。」これが大きなテーマになっている。

そして、自分を知る方法として、「外の世界（他者）を知りなさい」というのが真っ先に出てくる。

他者と出会う方法として上げられているのは、〈対話的関係（ダイアレクティク）〉を持つことだと言われる。「対話」によって〈個性と個性がぶつかって火花を散らすとき、さらに深い自分の個性が見えてくる〉わけで、これには共感する。

この読書会も、そのような意味を持っていると思う。毎月、自分の言葉で話したり書く事によって、自分とは異なる他の参加者の言葉を聴かせてもらう、感想文で読ませてもらうのだ。さらに、それを翌月も引き継いで対話の続きができる。

相手を説得するために言葉を探すのではなく、自分を尋ねるために言葉を見つけようとする。出会って対話をすることは、話す抑揚やスピードや視線や手の動きさえ言葉として聴くことが出来る。対話が出来る関係性は、貴重なものだ。

そしてもう一つの方法が、〈自分の夢やファンタジーの世界から自分を見つめ直す〉ことだ。人には様々な可能性があると知ることになる。

著者は、知るという好奇心と同時に、〈生きている事を楽しむ〉という暮らし方を提案する。もともと、生活を楽しむために生きているのだと言われる著者だから、食べたり飲んだりしゃべったりおしゃれして男性と遊んだりするのがおもしろい、と言われるのはあり得るとして、最高の生きている瞬間は、〈人を愛するとき〉だと言われるのが目を引いた。〈愛という自己放棄〉の素晴らしさをあげておられる。しかし、〈そう簡単にできることではない、〉とも。〈愛は幻想から生まれる〉とちゃんと釘が刺してある。愛についていうなら、「自己」という存在は、やっかいなのだ。

やっかいな自己。そうなのだ。やっかいだから「確固たる自我を出発点にしない」というのは、ユング学者の文に出てくる言葉だ。

禅寺の生まれという著者は、なにかにつけて、「自己」を問題にする観点が多い。

「仏道をならうというは、自己をならうなり」（『正法眼蔵』道元禅師　1200～1253）というのが先達の教えだから、「自分を知ろう」というのは、800年くらいの世相を通過してきている。その続きとして現代風に書かれたのがこの本だ。

仏教学部禅学科を持つ駒沢大学に入学しているのも、留学した先がスイスのユング研究所であったのも、仏教思想の見えない縁が感じられる。

精神分析の一種であるユング心理学は、ユング研究所にいた河合隼雄氏の著書が日本で出版され始めてから、その名前が瞬く間に広がった。河合隼雄氏のユング心理学の療法は「箱庭療法」とよばれ、非言語的表現の多い日本人に向いていると言われている。私も、何十年か前にユング心理学にであって興味を持った。

西洋的合理主義による性急な「解決」を目指さない思考方法も、親しみを感じた。日本に紹介されるユングに触れてみると、キリスト教を中心思想とする西洋思想の中にあって、仏教思想的なものが感じられるユングの説である。

著者の秋山氏にもユングに関する著作が多い。

今回の著書にもユング心理学で使われる言葉が出てくる。

生理的な男女を意味しない「男性性」「女性性」という心理的な特徴。

男性の中にある女性的な元型「アニマ」。

女性の中にある男性的な元型「アニムス」。

自分の影の部分「シャドウ」。生きたかったもう一人の自分。他への投影も。

自分の実人生を仮面的に表現する「ペルソナ」。著者は「肩書き」と訳する。

自分の様々な要素を押し込めている「無意識」。

ユングは、これらによって自己を知ろうとした。その成長の仕方を「自己実現の道」と言う。著者の訳では〈無意識的で習慣的なこれまでの人間のあり方から脱出して心の自由を獲得して行く道〉として示した。

自分に解っているのは心の中のほんの一部に過ぎない。著者は、ユングの言葉を借りて、自分の「無意識」の中にある共感や悲哀を引き出し、恐れ気なく自分を賭けて生きてくださいと言う。誰でも自分についてほんの少しのことしかしらない。

「無意識」の中の自分に出会うのは、他者の発する言葉（大きい意味での言葉）に出会って、ビックリしたり、感動したり、質問が生まれたりする事によるのだと思う。 これは、死ぬまで経験できる新鮮さなのだ。もちろん、自己認識は間違いだらけかもしれない。しかし著者がユングの声を教えてくれている。〈「大いに間違ってくれたまえ」〉

「自己」を知ろうとすることによって、心の中から新しいイメージを発見する期待が持てる。どこまでも「自己とは何か」という問いは続く。著者が〈「無我」を「ノン　エゴ」と訳しても始まらない〉と笑いを提供する表現をしているが、学術論文のスタイルはとっていなくても、本の根は、時代や洋の東西を問わず、どこまでも続いている。この本も終わらない。

『いい女へのパスポート』を読んで

◆【 TK 】

題名をみた時、良い女、つまりお洒落で素敵なひととなるための本だと思っていました。ところが、ユング心理学の方の自伝的な本でしかもユングの内容のことはかかれていなかったのです。

時代は高度成長期の日本の真っ只中にかかれています。
それで、男女差別均等法がさけばれていた時で筆者自信の結婚について焦点があてられていました。

今メディアで差別に関する事があちこちで強く叫ばれています。今秋山さんが本を執筆なさるならこの事を書くことでしょう。今まで普通に言っていたことが、これは差別だ！と盛んに言われています。ジェンダーとか発達障がいとかもです。

この本は古い考えだと思いましたが、その当時はそれが主流でそれが最高だったのです。私が若い頃はなぜこうだったと振り返っても私の当時はこれが精一杯だったと同じようなものなのでしょう。

家庭とか親、出会った人のなかにいて方言みたいに無意識に自己表現がなされているのです。

しかし、今はインターネットとかでいろんな人の考え方を遠くにいて会えなくても知ることができます。この読書会でも本の中の人物にも会えます。

自分を変えていくことはできやすいかもしれませんが、自分を知ることは無意識だけに難し

いのです。読んでは立ち止まって考える時間が必要だと思いました。
　昔、センスアップセミナーを受けたことがあるのですが無意識の自分を向上させるという意味がありました。
　姿勢とかは特に無意識にしているのです。ユング心理学は無意識に関する事が含まれているとのこと。
　無意識を向上させるためには、自分の思いをたくさんかきだし、それをつなげてき、自分の納得するものじっくりくるものを見つけ出したら良いそうです。
　この読書会での作業がまさにそうです。これからは三行日記も良いかも知れないと思いました。

◆【 T 】
　いい女ってどんな人なんだろう？魅力的な人とか感じ良い人とか尊敬できる人というのならわかるが、なぜ女に限定しているのだろうか。少々不思議な感じがした。この本が書かれたのが、1986 年なので 1980 年代の女性の社会進出について考えてみた。
　当時は、女性の社会進出を阻むものが多く、結婚退職が主流で、出産後も仕事を続けるのは大変な事であった。仕事によっては、30 歳定年説もあった。しかし、1986（昭和 61）年の「男女雇用機会均等法」の施行は大きな時代の転換点となり、好景気と結びついて、女性の社会進出も徐々に増えてきたが、まだまだ社会の意識・個人の意識は十分ではなかった。
　そのような社会情勢の中、女性も変わらなければ、より成長しなければということで、このような題名を付けられて売り出されたと思われるが、内容は女だけに限らず、男女どちらにも当てはまるものであり、読んで納得できることが多かった。エピローグの中に、「女性の生き方というものが、家庭環境や親の影響によって作られたものであったり……それらのことに無意識的に縛られずに、外の広い世界を見ることによって、自分自身がいろいろな制約の中にいることを自覚し見直すべきなのです。……制約から自由になるということも大事な事なのです。」とあるが、これは、女性に限らず男性にも当てはまることだと思う。〈男らしく・女らしく〉という社会の中、歴史の中で作られた性別役割から解放され、人間そのものの在り方を考えて欲しいというのが作者の願いだと思う。

◆【 N2 】
　いい女とはどういう意味でしょう、何処で、どんな時、誰にとって、誰から見て、と色々考えると、果たして何を、誰を指しているのか解りません。パスポートとはどんな物なのでしょう。意味不明の「私はいい女ですよ」ということを何処に行っても証明できる通行手形なのでしょうか。いったいそんな物があるのでしょうか。
　作者は私の母と同じ時代を生きています。芯の通った明治の女に育てられ、モボ、モガを

目にし、モダニズムの感覚を養ったのでしょう。レールに乗った結婚が破綻した後、晴れて自由の身となり伸び伸びと自分の納得する生き方が出来たのも、生まれ育った環境があったからでしょう。同年代の女性の中でも進んだ考え方をして、一歩先を見据えてこの時代に活躍された人なのでしょう。ちょうど男女雇用機会均等法が施行された 1986 年に発行されたこの本は、女性も外に出て働きなさい、寄りかかった暮らしは隷属ですよ、経済的に自立して、ひとり暮らしの醍醐味を味わってご覧なさい、という生き方のアドバイスです。この男女機会均等法の施行された年は私世代の働き盛りの時代と重なります。女性もライフサイクルの中で仕事をし、自分の納得する生き方をすることがこれからの流れですよ、それには男性も育児家事などの仕事を半分は負担しなさいよと。効率優先の男性社会に女性が加わって、職場に人間性を取り戻し、トータルな人間の、生活を大切にするような精神的な社会を作っていきましょうと。性別に関係なく、自分を大切にして自分の納得した人生を送ることは時代に関係なく誰もが望むところです。施行から 37 年経ち我が子が働き盛りとなった今、この本を読んで、作者の言う仕事と人生の過ごし方をしてこなかった者として思うのは、人にはそれぞれいろいろな人生の送り方があるのではないかということです。暮らしと仕事のバランスの取り方は、時代を経て幾分かはこの本の言うところに近づいたのでしょうが、今でも各々が働いている社会環境によってその理想には大きな差が出ていると思えます。

ここでの「働く」という意味についての読書会での話はとても参考になりました。働くとは外に出てサラリーを得るという意味だけでなく、存在していることで誰かに、何かに働きかけていることも働いているというのだと教えられました。

この本の人生設計と仕事に関しての書き方と、題の付け方、発行の時期を考えると、作者は時流に乗って上手に世を渡ることが出来た方だったのだと感じました。男女雇用機会均等法に沿った内容で一冊仕上げてほしいと依頼されて書かれた作品だったのでしょうか。

◆【 KH 】

今回も、絶対自らは手に取らないであろう“本”との出会いをいただいた。
ずいぶん昔に書かれた本だし、時代背景を考慮して読まないと？？？な部分がたくさんあるのは確かだった。しかしあえて課題本に選出されているということは、時は隔たっていても、きっと読み取るべき、大切なことが書かれているはず。

皆さんの感想を聞き書きしたメモも見返しながら、筆者に共感したところは、201 ページ、「なにごともきちんと考えて行動すること。」という箇所。広く世界を見てと言われても、叶わなかった当時と比べて、今は情報の海を泳いでいる、いやうっかりしていると溺れそうになる。だからこそちゃんと自分で考える！これは大切なことだ。誰かに、何かに倚りかかって、隷属するのではなく、自分で考える・精神的に自立すること。ここで頭に浮かんできたのは、大好きな尊敬する詩人「茨木のりこ」さん。“倚りかからず、自分の感受性は自分で守れ”を是とされた茨木さん風にいえば、この本のテーマは『倚りかからない女（ひと）へのパスポート』か！いい女になりたいとはあまり思わないと申し上げたものの、倚りかからず行きていくのは理想だなあと思う。

心理学的 意識・無意識について、先生が教えてくださったけれど、意識するとは、自分の言葉にすること。自分の中で引っかかった何か、言葉にしてこなかった何かを自分の言葉にする作業は、幾つになっても可能だし、自分で考えるとは、そういうことなのだな。六〇余年も生きていれば、自分のことはよくわかっている“つもり”でも結構見落としていることはあるんじゃないか。という気がしてきた。思いもしない自分の可能性にひょっとしたらまだ出くわすかもしれないという微かな希望。そして感性をもっと磨いて磨いて、光を当てていくことで、新たな人間関係も開けてくる。自分を知ることと人と関わること。双方行きつ戻りつすることが人生を豊かに生きるということかなと、今回はそんなことを考えた。

◆【 望月悦子 】

今回の例会は、課題本「いい女のパスポート」の題目について話題が白熱しました。

「いい女」とは何を指すのか。「パスポート」とは何を意味するのか等々。

吉川先生は「パスポートとはアイデンティティを分かりやすく言ったものよ」と軽くおっしゃいました。アイデンティティとは何だったけと慌てて調べてみました。『「アイデンティティ」とは、「自分は自分であると自覚すること」「連続性のある自己認識を持つこと」「自分の価値を他者に認められること」などを意味する表現である。わかりやすく言えば、自分が何者であるのかを認識して他者と区別できる状態である』とのこと。なるほど先生のおっしゃる通りで「自分が自分であることを証明する」そう考えると理解しやすい。編集者が売れる本にするために考え付いた題名で何も「いい女」にする必要は無いのにと私も思います。

著者はこの本の中で、終始「自分を知ることが人生の第一歩。豊かな人間関係を持つには、自分自身が豊かになるしかない。自分自身を見つめ、自分の中にあるものを掘り起こして、自分が何に興味があるのかそれをはっきりさせる。その興味の対象を追求していくことが、自分を豊かにすることになる。」と述べています。そこには「女」も「よい女」も文言は感じられません。編集者が意図的に「よい女」の方に近づけ、購買力をあげようとする目論見が見えてきます。批判的に本を読むことも疑問点を解明するのも読書会の醍醐味であることがよくわかります。私が見落としていた箇所に「自分が生きられなかった陰、自分の中に生きられなかったことを生きようとする陰」の指摘にあるように、私の義母を自分が生きられなかった反面教師として私は自分の人生を生きてきたことを思い返します。義母は、東京在住の兄が結核になってその世話で東京に行きました。兄から若い者が世話だけで過ごすのは勿体ないと看護の合間に学ぶことを助言されたそうです。そこで東京女子専門学校（現東京家政大学）に進学し、正規教員免許（当時は訓導と言っていたようです）の資格を取得しました。兄が亡くなったため、三原に帰省し小学校教員になって職業婦人として頑張っていたようです。当時としては珍しく女性が正規の資格をもって主任の立場で勤務していたとか。歳のいった義母はその後結婚して、島の封建的な家に嫁いだため、女が仕事を持つことを反対されました。強制的に家内の仕事を強要され、その上義母は、論理的で弁が立つため舅には可愛がられたけれど、姑には相当嫁いびり（今でいうパワハラ）されたようです。私は結婚後その話を何度も聞かされました。「その話はこの前聞きました」と言っても「最初から話さない

とわかりません」と延々と何度も聞かされるわけです。主人曰く「壊れたテープレコードだと思えばいい」と。そうしながら私に変化が見られました。最初は同情、聞くたびに姑の受けたいじめと時代や環境に怒りを感じ、同じような生き方をしてはならないと強く思うようになり私の人生目標が明確になりました。それから私の一本道が開かれたのです。でも、義母の偉くて尊敬できることは私に対して嫁いびりを決してしなったことです。義母の話す内容は、ほとんどがいじめと理不尽に思える内容ばかりでしたが、話はいつも「私は悦子さんを決していじめない」で終わります。その当時は、「これで今日の話はやっと終わった」と思っていました。今日までのプロセスを自伝として書くならば一冊の本ができるほどの分量です。でも、それを世に出そうとは思いません。なぜなら体験は一人一人違うから。自分の人生は自分で考え、試行錯誤しながら乗り越え、「今私に必要なことは」「今私にできることは」「今私がしなければならないことは」などを考えながら生活してきたからです。逆に、一本筋を通した生き方と言えば、「すばらしい」と思えますが、裏側からみれば「専門バカ」で常識のない狭い世界しか知らないとも言えます。「『how-to 本』は好きではない」と言ったメンバーがいらっしゃいましたが、私も同感です。この課題本の内容を参考にはしてもいいけれど、鵜呑みにするのではなく、この点はおかしいと疑問に思ったり、そう思える理由は何などと考えたりして、皆と語り合い深めていくことの方が大事であり、自分自身を豊かにすることだと思うのです。

もう一点気になったのが、「ユングの無意識の領域」です。吉川先生はいつも「わからないことを分からないままにしておかない」とおっしゃってくださいます。十分理解できないまでも調べてみました。

「ユングは、『集合的無意識』といった新しい概念を生み出し、“無意識”の領域を明らかにしています。人の心の働きは意識のコントロールや認識を超えた“無意識”の働きが大きく影響する。このように、自分自身でも意識できない部分が大半を占めているという考え方に基づく心理学、それがユング心理学です。ユングにとっての無意識とは、『個人的無意識』と『集合的無意識（普遍的無意識）』の2つの要素に区別しています。まず、人の心の構造を「意識」「無意識」の 2 つの領域に分類することができると考え、その 2 つの領域が対になることで『心』のバランスを保つことができると説いています。ユングは、意識（自分の知り得る意識）と知り得ない意識（無意識）のバランスが崩れた際に、精神疾患を生じると考えています」なるほどユングにとって無意識とは、精神疾患の発生を説明する時に不可欠な要素となっているのです。ここから「箱庭療法」などがあることも理解できました。また、ユングにとって「人の心の動き」を「思考」「感情」「感覚」「直観」の4つの機能があると解説しています。4つの機能で「どれが最も働くか？」で人の心の動きをタイプ的に分けています。

「思考」は物事を理に適った捉え方をする心の機能で、理屈で考えようとするタイプ

「感情」は好きか嫌いかで判断する心の機能で快・不快で物事を捉えるタイプ

「感覚」はものごとを「そのまま」とらえる心の機能であるがままで感じ取るタイプ

「直観」はものごとをおもいつきで判断する心の機能でひらめきで物事を捉えるタイプ

このように、ユングは人の心の動きに注目したことにより、人間の心の特徴に気づくことができ治療や研究に役立てていたことが理解できました。

著者がこの本のなかで力説している「相手を求めるよりも自分がどんな人間なのかを知るべきだし、自分の感性を磨くことが本当の意味での人間関係を持つ第一歩。本来持ってい

るものを育てることが大切」ということは、ユングの影響を受けていることが理解できます。
　今回も深読みできる課題本に出会え感謝です。

◆【 MM 】

今月の課題本のタイトルは『いい女へのパスポート』。…「いい女」って何なの（大きなお世話）。…「いい女へのパスポート」って何なの（なりたいとも思わないのだが）。と思いながら手に取った。

出版されたのは今から37年前。内容の中には納得できないこともあったし、そうそうと思える部分もあった。読書会に参加してよかったと思ったのは、出版された時期のこと、時代背景を丁寧に調べてきた参加者がいたこと。私は37年前に書かれたものという認識はあったもののその頃何があったかまでは調べなかった。雇用機会均等法がキーワードの一つと言えるだろう。第3章（女性にとって仕事とはなにか）がキーワードと結びつくかもしれない。読書会では「仕事」とはなにか、について盛り上がった。金銭を生み出す仕事を思い浮かべる人もいる。でもそういう仕事に就いていない人が仕事をしていないとは決して言えない。私が思う仕事とは。その人がその人にしかできないことをすること。人に求められてすることも仕事、人が仕事をしやすいように調えるのも仕事と思うのだ。仕事について考えるとともに、いい女についても考えてみた。いい＝良いではなく魅力的、またはそうありたい人と言ったらいいか。私が思ういい女とは、自分を持っている人である。人と違う時には流されない、しかし自分がいいと思ったことは受け入れる素直さもある。そしてなりたい人に更新していく女性が「いい女」かしら…と思った。

もう一つ読書会に参加してよかったと思ったこと。その時代に書かれたという視点にたって意見をいう参加者がいたこと。私は今の価値観からずれていることに焦点をあてて読んでしまったが、その時代に書かれたものだからとヒントを示してくれたことは私には大きかった。その時代を走る女性が書いたこの本。今とずれていてもその時代では先取りというか最先端だったかもしれない。37年前、私は10代だったがまだ専業主婦は周りに多かった。その時代に社会に出て仕事をすることを薦め、結婚観の変革についても触れていた筆者。今時代が本に追いつき追い越した部分もある。出版からほぼ40年。筆者の思い描いていた社会になったのだろうか。